遺族 CO患者 の現状を訴える

低賃金はCO後遺症を悪化させている

原告団事務局長　池畑重富

今日もまた、大学ノートに家内が鉛筆をなめなめ、なにかを書いては考え、頭を横にふっている。

きまってみんなが床についてからである。「早よう寝ればよかつに」と思い、そおっとのぞいて見ると、二ケタ、三ケタの数字を斜めに横に書いて計算している。

「なんぼしょっとか」と聞くと、「父ちゃん、今月は三万五千円は足らんばい」と、毎日の生活費を計算しているのだった。そのたびに「どきん」とする。

一月分の賃金は二十一万、有給二日で十一万六千五百円。二月分が風邪をひいて五日休み十八万、有給五日で十万六千五百円だった。叔母の急病で、母を沖縄にやるために共済会資金を借りたので手取りである。これで家族五人が生活していかなければならない。

今年は、中三、中一、保育園と子供たちの教育費がかさむ。なかでも中一になる男の子の制服一式で三万円がとんだ。

小学校の卒業式が十八日だった。家内は、私に「行ってくれ」という。子供は母親がいいという。家内は「なんば着ていくね、はずかしか」「あんたならネクタイ（はめたことはないが）をはめて、上着を着ていけばそれで済むやろが」という。私は「一日休むとまたきつうなる。すまんばってん行ってくれ」と頼んだ。やっとのことで暗黙の了解でおしつけた。

私の職場では、十一万円から十二万円ぐらいの賃金で、高校にやらねばならぬ仲間もいる。三月になり、まとまった金もなく、共済会と会社の就学貸付金など、すべてをかき集めて一時しのぎはできるが、毎月の三万円の学費をどうするのか。

いま、CO造成職場の中では、風邪をひいて咳をしながら、また腹を押さえて生活のために、無理をしつづけて、一日をがまんして頑張り、身体の異状にたまりかねて病院に行ったTさんは、三月二日即入院となった例もある。

最近、床についても十二時、一時を過ぎても寝つかれず「明日はどげんなっとか」と考えて、頭をかかえめぐり頭が痛い。ネルボン五ミリを二錠、口にほおばって焼酎で流し込む、そんな日が続いている。

三月二十三日、CO造成職場の組長会議を開いたが、その中でも「少しでも残業したい」「もう少し金のとれる職場に配転を考えねばならぬ」「しかし身体が持たず、今の軽作業でやっとだから」などの意見が出た。

これは、低賃金を押しつける三井への不満であると思う。

あの三池大災害の爪あとは、一人ひとりの身体をむしばみ、人並みに生きたいという、せめてもの希望すら切り捨てているのではないか。

苦しい現状の中で、生き抜く方法を一人ひとりが模索している。その中で分会として問われているのは、全員が結集して生活保障につながる、完全治療をどう闘い抜くかということだ。いま、ままならぬ身体がそれを求めている。

病のなかの遺族

遺族会事務局長　永江美由紀

三池大災害の遺族会の会員は、いまアソニット工場に十七人、三池縫製工場に十三人、一般が百十八人、合せて百三十一人ですが、そのうち病弱者は、大牟田六人、荒尾十一人、熊本県四人、福岡県一人、遠隔地三人という状況です。

せめて医療費が無料になっていればいいのですが、その前の人は医療費にもとと欠く実態です。しかも長期に療養しなければならず大変苦労しています。

わずかな年金で、細々と生きている遺族たちの実態を、ぜひ知っていただきたいと願わずにいられません。

当時四十万円の弔慰金と、わずかなお父さんの命の金を、泣き泣き治療に使って今日まで生きのびてきた私たちです。この苦しみの根源はあの大災害です。絶対に許されることではありません。健康をそこね、金もなく泣いた十八年間です。そして、これからも生きていくかぎり、続いていく苦労なのです。

現在入院中の遺族（四人）

田中ジツエさん　53年11月から
岩崎　久子さん　55年8月から
富久　シマさん　56年11月から
溝口　生松さん　57年3月から

長期療養中の遺族（二十五人）

角サツキさん、古賀リツエさん、富久シマさん、中島タツエさん、加納トメ子さん、水流ミエさん、永江美由紀さん、井上ツゲさん、田中ジツエさん、森沢トラさん、土山勝雄さん、丸山キクヨさん、中村ツヤ子さん、川島草苗さん、渡辺さちさん、北川スミさん、西島幸孝さん、鶴ハルノさん、西川カオリさん、岩崎久子さん、江頭ヤエ子さん、溝口生松さん、池上タツ子さん、平川厚子さん、野田明好さん

× ×

寄せられたレポートには、各遺族のみなさんの殉職者のお名前、続柄、現住所、発病、病名、実態など克名に書かれていましたが、紙面の都合で整理、割愛させていただきました。機会があればいずれご紹介させていただきます。

（編集部）

なぜ専門医がいない

CO家族の会会長　石原マサ子

長い間、CO患者を診察してこられた大牟田労災病院の院長が退職され、後任に三井天領病院の内科医長だった川嶋先生が、院長代理におさまっておられると聞き、驚きました。そして精神・神経科の専門医でもない川嶋先生が、万田訓練所（治療中患者）や万田作業所（年金患者）を診察されたと聞き、家族として大変心配しました。

原告団としては、組合を通じて労働基準署に要請行動を行ないました。その内容は

㈠ どうして精神・神経科の専門医でもない川嶋先生が、CO患者を診察されたのか。

㈡ CO患者は、精神・神経を犯されているので、精神・神経の専門医をおき、治療をする目的で大牟田労災病院ができたのに、高松所長のかわりに、なぜ内科医をおいたのか。

㈢ 三井の企業病院から、政府の労災病院に行くのはおかしいではないか。

そのほかにも労災病院の設備内容の不備について家族から訴えました。それに対して、署長は

㈠ 川嶋先生は、成人病関係で一回だけ診察をしておきたかったという話でした。

㈡ 挨拶に見えてはじめて知りました。労働省の方で決められたのです。

㈢ そうですね、という返事でした。

災害当時は、治療方法がわからない、文献にないから、といって初期の適切な治療が行なわれず、長い歳月の中でいろいろな病気が出ています。特に打ち切られた患者の死亡率が高く、災害後三十一人の死亡者のうち、二十六人が治療打ち切り者です。私たちは合併症、続発症に認めるように今まで闘ってきました。それを成人病としてかたづけられることは絶対に許せません。

またCO患者の病院であるから労働省がいちばん専門医にこだわってきたのに、今度にかぎって、特に三井病院の内科医を認めたのは全く不思議です。私たちは所長に、精神の神経科の専門医を一日も早くおくよう要請しました。署長も労働省に対して努力をするということでしたので、近日中に努力の結果を聞きに行くようにしております。私たちは問題解決までがんばる決意です。

× ×

原告団消息

3月12日　溝口生松さん（遺族会会長）中友診療所へ入院。

18日　原告団編集会議。

21日　小川紘志さん（原告団団長）大牟田市大字新町二一一の二へ転居。

24日　CO家族の会役員会議

30日　学習会「裁判闘争について何をなすべきか」

北炭夕張大災害を追う

資料

その背景になにが……その二

北炭は明治二十二年、北海道庁から幌内炭鉱（北海道三笠市、現北炭幌内炭鉱）と、幌内――手宮（小樽）間の鉄道の払い下げを受けて創立された。以来、三笠・夕張を中心に多くの炭鉱を経営する一方、夕張――室蘭間の鉄道敷設を手がけて国に売却するなど、常に時の政府と密接に結びつき、好況のときはもうけ、不況のときは政府の力にすがって生きのびてきた。

だが、そのかげにはいつも多くの炭鉱労働者が犠牲になっている。明治の終りからは、多くの朝鮮人労働者が連行され、強制労働に従事させられた暗い歴史を持っている。

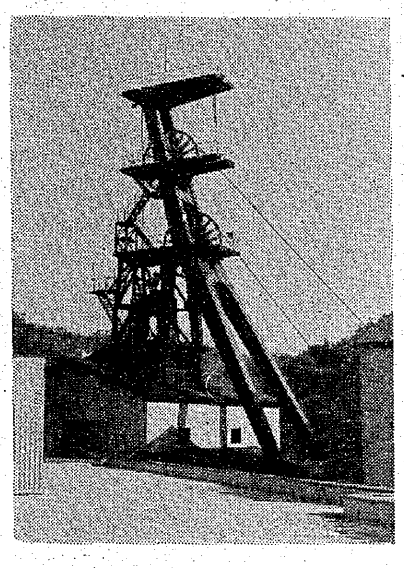
また大正二年、若鍋鉱（夕張）での四百二十二人が死亡するガス爆発のほか、一九七五年十一月の幌内鉱のガス爆発では二十四人を殺すなど、歴史に残されているだけでもゆうに千人をこえる犠牲者を出している。いったい北炭とはどんな会社なのか、今回も引用により追うこととし、さらに次回では北炭前史をさぐってみたい。

× ×

一八八九（明治二二）年、北海道炭礦鉄道会社（資本金六五〇万円）が創立され、幌内炭鉱と幌内鉄道（手宮―幌内）が払い下げられる（代価三五万円）。一九〇六年、同社は鉄道国有化（買収価格三、〇九九万円）で北海道炭礦汽船株式会社と改称。その後、北炭は明治・大正・昭和を通じて三井、三菱に次ぐ石炭資本に成長し、そして今なお幌内・夕張などの炭鉱を存続させ、さらに新規炭鉱を開発し、「斜陽」石炭業界で大きな影響力をもつ企業（資本金七〇億円）である。しかも、その準国策会社的のれんは、三井鶴光開発KK（資本金五五・三億円）をはじめとする多くの関係会社をもつ〝北炭グループ〟を形成させてもいる。

「北炭を発展させたのは、優良炭田に立地し、輸送機関を独占していたのと、株主に有力な大資本家が加わり、会社首脳に経営能力と政略にたける人材を集めた人脈によって、群小企業と比較にならない国家援助を引き出したことにある」（佐藤忠雄『新聞にみる北海道の明治・大正』一九八〇年）

「（戦前傘下に収めた傍系会社一二社を終戦後の再編で手放したものの――引用者注）北炭は、わが国経済の自主性回復とともに、しだいに前の関係会社と資本的なつながりをもつ一方、新会社を設立して関連部門への進出をはかってきたが、世界的エネルギー革命の進展にともなう、経営合理化の一環として、従来全く縁のなかった観光面にまで進出、今日では戦前にまさる多くの系列会社をもつにいたっている」（「北海道開発の中核として活躍する北炭グループ」『東邦経済』一九六八年八月号）。



北炭夕張新鉱の竪坑。